ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと“風”

第136号（２０１７年９月）

風に吹かれて（113）

白井啓治

・枯草に蜥蜴の昼寝　陽光は秋の色

情けない八月の陽気に合わせるかのような実りの見えない我が県の知事選挙であった。実質二強の選挙戦であったが、その政策を見ても中身の薄い、何をやろうとしているのかも、この県の将来がどういう姿になるのかも語られない選挙戦であった。総花式に公約のようなものが並べられていたが、総花式に項目を散らせば全体最適になるとでも思っていたのだろうか。友人から、何せド茨城ですから、と言われた言葉だけが耳に残っていて、今も頭の中にグルグル廻っている。

次は、わが石岡市の市長選であるが、立候補する人にはもう少し内容のある、明日の石岡市における全体最適なビジョンを語ってもらいたいものである。あれもやります、これもやりますというのは何もしない、何も出来ないことを意味する。また、選挙戦に都合の良いデータだけを取り上げ、それを自分の成果のごとく話すというのも何もしていないことを吹聴するものである。

しかし、何よりも重要なのは選挙人の、選挙意識であろう。すべての責任は、個々の選挙人にあることを肝に銘じて、何が全体最適なのかを判断し、投票することである。

さて、この９月で小生73歳となる。やっとこ人生の暮らしが一回りし、余禄の候にはいったと思っている。

一般的な暦で言うと60歳で還暦というが、日々の暮らしの暦で還暦を考えると、1年には72の暮らしの季節の移ろいがあり、その72の暮らしの季節が72回転することで暮らしの暦での還暦が来る、と小生は考える。

72候が72回転で還暦と考えると、「まだまだ還暦、人生これから」ではなく、「日々の暮らしの暦が72回転したのだから後は余禄、ご褒美」と考えることが容易になる。

72歳が終わって還暦と考えると、人生未だ未だこれからと我欲に夢中することがなくなるのではないのだろうか、と思っている。

我欲とはある意味生きる力ともいえるが、我欲が強いとせっかくの余禄が余禄でなくなってしまう。ご褒美の時なのだから、美しく暮らしを褒めることをしなかったら何のための人生だったのかと悔いが残ってしまう。人生を終える時ぐらいは穏やかな無で居たい。

先日、小生を文化・記録映画の世界に引き込んだ先輩が亡くなった。85歳での往生であった。彼もまた73歳で余禄・ご褒美の暮らしを始めた。お通夜・葬儀に行ってきた友より、穏やかに笑っているような顔でした、と連絡が来た。寝込むこともなく「じゃあネ」と命を終わらせたようだ。

愚かな戦争によって、すべてを破壊尽くしたことで、復興を復興をとひたすら上を見て駆け抜けてきた戦後70年であったが、脇見をすることを忘れてしまったものだから、自分たちが自然の中の一つとして暮らしを作っていることを忘れてしまった。

経済最優先の脇目を振らせない駆け足は、東日本大震災で原発事故を呼び込むことになったが、それでも未だ懲りることなく走り続けようとしている。人類はひたすら滅亡へ向かって走っている、とは随分以前より言われているが、その言葉にしっかりと向き合おうという姿が見られないのは、滅亡の意味を理解しようとしないのか、その言葉そのものを持っていないのかであろう。

映画「猿の惑星」を面白いフィクションとだけ見て、その作品から何かを考えるということをしなかったのだろうな、と淋しく思ってしまう。

10年近く前より72季節の話をするようになったが、自然の中に暮らす生き物の本来の姿が示されており、改めて今を振り返る指導書のように思える。

「お前、ちゃんと生きているか？」
「ああ、ちゃんと暮らしているよ」
「お前、もう喰った？」
「いや、今年は未だだ」
「女房を質に入れても喰えというじゃないか」
「だが、うちの女房は質草にはならねえな」

起こり得る最悪の事態

菅原茂美

大げさな予言などをして、得意になるつもりはないが、これから述べる事は、地球温暖化により、近未来、かなりの確率で起こりうる最悪のシナリオである。

地球温暖化は、本気で抑制しないと、人類を滅ぼしかねない「悪性伝染病」が、全地球規模で蔓延する可能性が、非常に高くなる。人類滅亡だけではなく、他の動植物も一様に衰退する。

この惑星が不毛の砂漠とならないよう、人智を尽くして地球環境を守り、安住の地を子孫に残す事が、現代の我々の責務と考える。

【地球温暖化：１９０６年～２００５年の100年間に地球表面温度は０・７４℃上昇した。これを分析すると、人為的要因（温室効果ガス増加等）が95％以上と言われ、このまま続けば２１００年には、最悪で６・４℃上昇するという。その結果は、海水面が２・５㍍上昇。洪水・旱魃・ゲリラ豪雨など増加し、多くの生物種が衰退。しかし、ここ30年以内に、CO_2（二酸化炭素）排出量を現状以下に留めれば、遥かに安い経費で温暖化は防げる。なお、参考までに、今から１万５千年前（氷河期）、太平洋の海水面は、現在より90㍍低かった。その為モンゴロイドは、ベーリング地峡を歩いて渡り、北米進出ができた。又、海水面の史上最高は、現在よりも200㍍高かったという。】

さてそれでは、地球温暖化は一体どんな災害をもたらすであろうか？

＊

① 人類に感染する「鳥インフルエンザ」

１９１８年、全世界に蔓延した「スペイン風邪」は、風邪ではなくインフルエンザである。病原体は鳥インフルエンザウイルス（Ｈ１Ｎ１）である。

スペイン風邪は、人類史上記録に残る最初にして最大のインフルエンザである。本病のパンデミック指数（流行の強度）は最悪のカテゴリー５に分類される。当時世界人口は約20億人。感染者数は５億人。死者数は１億人。今日なら５億人死亡との事。又、当時日本人口は、５５００万人で、本病による死者数は48万人と言われた。

スペイン風邪について詳しく述べると、当時世界で最も早く流行したのは、米国であった。しかし、それより早く中国で流行していたらしいが詳しい事は不明。当時、米国では鉄道建設が盛んで、中国から多数の労務者が働きに来ており、その中に、この風邪様疾患で死者が多数出、全米に蔓延していた。しかし当時は、第一次世界大戦の真っ最中で、不都合な事は公表されない。本病は、たちまちヨーロッパにも蔓延したが、やはり戦争中なので隠蔽された。だが、

スペインは中立国であったため公表され、「スペイン風邪」として世界に認識された。そのスペイン風邪が、なぜ再び猛威を奮い起こすか？

実は、アラスカで１９９７年、スペイン風邪により埋葬されていた多数の遺体が、地球温暖化により、凍土が融解し露出した。アメリカのＣＤＣ（疾病予防センター）が４遺体の病因究明をしたところ、いずれの遺体からも鳥インフルエンザウイルス（Ａ型Ｈ１Ｎ１）が検出され、動物実験で致死性の肺炎を起こす事が確認された（５年に他のグループも追試で確認）。

ところが昨冬、日本列島は野鳥等から多数、鳥インフルエンザウイルス（Ｈ５Ｎ６など）が検出された（22都道府県218件）。本県でも水戸市の千波湖周辺に、コブハクチョウなど死亡が見られた。その為、偕楽園の観梅客などに、千波湖周辺への立ち入りは禁止された。

日本は過去に野鳥からの鳥インフルエンザ感染により、養鶏産業に甚大な被害が出ているので、かなり徹底した防御システムが完成している。その甲斐があって、今回は大した問題は起きなかったが、ここで安心してはいけない。

永久凍土圏に１９１８年のスペイン風邪による死亡者が多数埋葬されており、地球温暖化によりその遺体が露出し、もし北極キツネや北極熊やヒグマなどが食い荒らしたりすれば、その残骸を猛禽類や渡り鳥などが更に食い荒らす。一般に鳥インフルエンザは、野鳥では即死の経過をたどるとは限らない。しかし哺乳類に感染すると、哺乳類のインフルエンザウイルスとミックスして遺伝子変異を起こし、致死的経過をとる事がある。それら渡り鳥が冬季に中緯度地帯に戻ってくれば、鳥から豚にインフルエンザが感染し、更に悪性の強度を増して人類に襲い掛かってくる。これは過去にもあった事実であり、当然考えられるシナリオである。

もしインフルエンザのパンデミック（大流行）が起これば、燎原を炎の波が走るように、全世界が超悪性のインフルエンザにより、死体の山が築かれる事が懸念される。地球温暖化により、こんな可能性がかなりの確率で発生しうる。決して私個人の軽はずみな杞憂による誇大妄想でも、白昼夢でもない。地球温暖化は正に恐怖だ。

私に言わせれば、米国のトランプ大統領の、パリ協定離脱など、想像を絶する超愚行政策である。地球温暖化は根拠のないデッチアゲだとトランプ氏は言う。さすがに良識のあるいくつかの米国の州は、大統領の命令に従わずパリ協定（２０３０年ま

でに産業革命時点より2℃以上あげない）に従う方針を定めているという。トランプ氏のパリ協定離脱理由は、石炭の需要減による炭坑労務者の雇用喪失を懸念したものらしい。

トランプ氏が、科学を信用しないというのであれば、金星の例で説明する。金星は地球の姉妹星とも言われ、明けの明星・宵の明星ともいう。しかし太陽は西から登り東に沈む。公転軌道に対し、自転軸はほぼ直角で、当然春夏秋冬の別などない。そんな事より、金星の大気は、

CO_2が96・5％（地球は0・038％）もあり、温室効果で表面温度は464℃（地球は15℃）である。勿論生物などいるわけもなく、灼熱地獄である（2017年イラクで50℃日本で37・1℃記録）。CO_2による温室効果とは、このように恐ろしいことを、トランプ氏よ！お分かり頂けた？

＊

余談ではあるが、悪性の伝染病が流行した場合、素早く全国民に予防注射を実施する事が大切である。しかし、過去の伝染病発生例から、医療関係者が真っ先に罹患・死亡する事により、助かるべき庶民も助からない事実から2009年、世界協定により、まず医療関係者に予防注射を実施する事が第一であるとされた。

私が現役時代、行政が日頃、法律により、家畜伝染病の予防注射実施を、いくら啓蒙しても、経営者は、危険が身近に迫らなければ、経費と労力が嵩むので、注射を拒否する例が多かった。しかし、いざ身近に家畜伝染病が迫ってくると、議員など権力者を介し、まず真っ先に俺の所の注射を実施してくれ…と圧力をかけてくる。真に醜い現象をいやというほど経験している。

関連して、現在、狂犬病が存在しない国は、オセアニアと日本だけ。海外旅行する人は、とにかく狂犬病の予防注射を受けてから旅立つべきである。旅行業者は集客のため、いとも簡単にその必要はない…などと云うが、日本人は、しばしば現地で犬にかまれ、帰国後、狂犬病が発症し、死亡者が出ている。狂犬病は、ちょいと治療などできる代物ではない。

なお、現在日本では、犬の狂犬病予防注射は法律で義務付けられている。ドッグフードの需要などから推測すると、日本の犬の狂犬病予防注射実施率は、50％を割っている。もし日本に狂犬病が侵入してきたら、たちまち大流行を起こし、人間も多数死亡する事になる。

甚だしい例は、予防注射は獣医師の金儲けのためだろう。病気がはやってもいないのに、なんで予防注射など必要なのか…と食い下がってくる人もいる。現在、世界中の至る所に狂犬病は存在。流行が始まってからの注射では間に合わない。免疫ができるまでには、3週間くらいかかる。もっと広い視野で物事を考えてほしい。

日本は法治国家で、治安と衛生に優れた先進国…などというのは、私に言わせれば、単なる幻影に過ぎない。アウトローはどこにでもいる。発展途上国への旅行は、一層慎重であるべきだ。

さて、物事には緊急性の序列があり、対応に当たってはその順位に従うべきである。悪性伝染病発生の際、恐らく今日の日本のような自由勝手主義が横行している現状では、予防注射の順位を、一般市民が、医療関係者より後回しにされるなどあれば、大騒ぎするに違いない。多くの市民を守るためには、まず医療関係者が、万全の態勢で足場を固め、その力により、市民は多数救われる事になる。

＊

②温暖化による熱帯病の蔓延

この事について私は過去、本会報で何度か記述してきた。温暖化は、低地の浸水もさる事ながら、温帯地方でも熱帯病が蔓延する事は見え見えである。最も人口の多い温帯地方が地球温暖化により、熱帯化すると、病原体を媒介する昆虫などが越冬でき、温帯地方でも生息可能となり、マラリア・黄熱病・デング熱・ジカ熱などが蔓延する可能性が非常に高くなる。

マラリアは現在世界70か国に存在し、年間ほぼ2億人が感染し、58万人が死亡している。具体的には、ハマダラ蚊が5種類のマラリア原虫を媒介する事により起こる。症状は赤血球破壊により高熱を出し、溶血によりヘモグロビン尿症、黄疸、急性腎不全・意識障害等。イタリアの民家が小高い所に多い理由は、低地では蚊の発生が多いので、それを避ける為ともいわれる。

霞ケ浦を「蚊棲みが浦」と揶揄する人もいる。近年、やっとマラリアの予防液が開発された。

私は20年前、国際協力事業で政府から派遣され、中米熱帯地方で、日本の獣医技術を、現地獣医師に技術移転する仕事をしてきた。その際、日本人プロジェクト延べ12人のうち、マラリアに感染しないのは私一人だけであった。その理由は、主としてマラリア予防のため、JICAの熱帯居住基準である半ズボン及び半袖禁止。日本製の蚊取り線香使用（又は蚊帳）。異常を感じなくとも、必ず予防的にキニーネ剤を毎日飲む事。夜、酒を飲んでも屋外をぶらつかない（ラテンアメリカは美女の誘惑が非常に強い）。ただこれだけの事を必ず守り通す事。私はほぼ完全にそれらを守り通した。薬も毎日飲み続けた。帰国後私は、すい臓がん等3種類のがん

に次々かかったが、熱帯病など既往症がなく、生活習慣病も殆どないため、術後の経過は比較的良好であった。

＊

③ヒアリ（=Fire ant 火蟻）対策

ヒアリが温暖化により人類の存亡に係る…というわけではないが、温暖化などにより、毒性の強い熱帯生物（毒蜘蛛・毒蛙・毒蛇等）が温帯で生息でき、人に大きな危害を加える事は避けなければならない。もし、日本にヒアリが侵入した場合（8月1日現在9都府県）、越冬の関係で、関東地方が北限と考えられるが、温暖化すれば別問題。ヒアリは人的被害のほか、家畜や農作物、更に公園や遊園地の閉鎖など被害は大きい。

ヒアリは、南米原産のハチ目アリ科フタフシアリ亜科で、特定外来生物。別名を「殺人蟻」ともいわれるが殺傷能力はそれほど強いものではない。もし疑いが持たれた場合、専門機関の鑑定を受ける事。ヒアリの毒素はトリカブトと同系のアルカロイドで溶血性・壊死性の細胞毒。生命に危険を及ぼすのは、アナフィラキシーショックが起きた場合。アメリカではヒアリのみではないが、虫刺されによるアナフィラキシーで、毎年100人位死亡している。なお、ヒアリの分布は南米の他、米国・中国・オーストラリアなど。ニュージーランドにも侵入したが、3年がかりで清浄化に成功した。今回のヒアリ騒ぎは、全て中国のコンテナに関するもの。コンテナには、ヒアリが存在しない旨の証明が必要。今後麻薬検査並みの厳重検疫が必要と考える。今回の騒ぎによりヒアリの鑑別に関し、簡便なＤＮＡ検査セットが近々、発売される見込みとの事。

④温暖化抑制対策

フランスとイギリス政府は、２０４０年までに温暖化を抑制するため、ガソリン車・ディーゼル車の販売を禁止すると宣言した。ドイツやフィンランドも続く見込みとの事。世界はのんびり戦争ゴッコなどしている場合ではない。

災害は復興対策に力を入れるより、災害を未然に防ぐ予防対策に全力投球すべきであろう。これは、長年家畜伝染病対策に身を投じてきた私の経験から、蔓延防止に力を尽くすよりも、予防対策に全力投球するのが本筋。

毎年記録的集中豪雨による被害などと報道されているが、50年に一度の降水量などは毎年どこかで起きている。２０１５年鬼怒川堤防決壊による常総市の氾濫は記憶に生々しい。地球は確実に温暖化している。毎年大規模災害発生は当たり前になってきた。ならばそれを予想し、高速道整備等、巨大投資の予算を転換し、山際の民家移動や、河川の堤防強化など、真っ先に対応すべきであろう。それが本物の政治。

私が考える地球温暖化抑制の対応策は、全世界の個人・家庭・各組織は、現在の消費レベルを一律10％下げる事。浪費しがちな家計費などを全世界が一割下げ、CO_2排出量は、１７６０年の産業革命開始時にまで、まず下げる事。

『現在の地球は未来の子孫からの預かりもの』という概念を徹底的に頭に叩き込み、皆が目先の利益追求する行動を、しっかり抑える事。

人類は大脳を膨らまし、あろうことか利己的な面を増長し過ぎた。己の欲望を満たすため、詐欺・窃盗・殺人そして、戦争さえも繰り返す。目先の利益追及のため、安易なものを次々発明・商品化し副作用を無視？して、薄利多売の小手先営業をする「偽の文明」を進化させた。プラスチック・化学繊維・怪しげな医薬品・洗剤・農薬・化学肥料等。極端に言うなら地球環境を長く正常な状態に維持しようとするなら、車や飛行機などこの世に現れるのは一万年も早過ぎた。

文明の進化はもっとスローであるべきだ。何もかにも一気に進展すると、伸びしろが無く、パンクが目の前に迫っている感じがする。

人類の滅亡について考える時、人類はそれほどバカではないから、現在世界が保有する9か国1万5千発の核兵器で、一斉攻撃の応酬による壊滅を来たす事は、ないだろう。もし滅亡するなら、強毒ウイルスに人のＤＮＡシステムが乗っ取られた時であろう。人類は大変高等に進化したつもりかもしれないが、あんなチッポケな悪魔に足元をさらわれるに違いない。

人類が誕生して７００万年だが、種としての寿命を延ばすのに役立つどんな事をしたか？　時代が進むほど寿命を短縮する愚劣な事ばかり繰り返してきた感じがする。むしろ親戚であるチンパンジーとペースを合わせ、末永く、ささやかな繁栄を続けるためには、偽文明のスピードを緩め、焦らずゆっくりと、仲間達の歩みに同調しながら、生きていくべきではなかろうか。

地域に眠る埋もれた歴史（30）　木村　進

茨城廃寺・舟塚山古墳方面（3）

7、万福寺 - 税所氏歴代の墓

貝地の高浜街道のばらき台団地入口に万福寺が

ある。万福寺は曹洞宗光林山万福寺といい、文明６年(１４１２)税所（さいしょ）貞成の開祖とされ、その後税所（さいしょ）氏の菩提寺となった。

この辺りに税所氏の屋敷があったと考えられています。税所氏は、常陸国の税や官物の収納をつかさどる役人として、その地位を固め大きな力を持っていました。寺の裏には税所氏代々の墓があり、五輪塔や石塔が多数建っています。また税所氏は百済の朝臣であったと寺の位牌に残されています。始めのうちはこの百済氏が税をつかさどる官職に代々ついて、役職名から税所氏と名乗るようになったものと思われます。
また青屋祭の司祭を世襲化させています。

この地域の隣の「貝地」は貝塚などがあったという地名ではなく、昔「廨地（かいじ）」と書き、役所の税や文書管理をしていたことを表わしています。朝鮮半島南部に存在した百済は西暦660年に唐により滅ぼされました。その時、関係の深い倭国（日本）には数千人の百済人が逃げてきたといわれています。税所氏もその一人であったのかははっきりしていませんが常陸国にもかなりの数の人が来ています。

本尊は日本で最も古い仏像と言われる善光寺の阿弥陀三尊を模した善光寺式銅製の阿弥陀如来三尊立像で、県の文化財に指定されています。

「阿弥陀如来及両脇侍立像、銅造鍍金三躯。像高は中尊49.2㎝、観音33.8㎝、勢至33.5㎝。
永仁３年（１２９５）の造立銘があり、三尊とも一鋳からなり、中尊は蟻柄差し、両脇侍は両肩蟻柄差し。宝冠正面に化仏などを差し込んだ穴が残っている。　中尊像内の心木には年紀のほか、檀那・勧進僧・大工などの人名が記され善光寺式の基準作の一つである。」（現地案内板より）

茨城廃寺の建設にもきっと百済の技術者がやってきていたのでしょう。百済が朝鮮半島で滅びた時（６６０年）に大勢の百済人が日本に逃げてきていました。そして「白村江の戦い（６６３年）」「高句麗滅亡（６６８年）」と続きます。常陸介の前進　初代常陸守は「百済王遠宝」です。西暦７００年です。百済王とは「くだらのこにきし」と読みます。百済国が出身ですが、日本の氏族の一つです。

８、景清塚（愛宕神社）

石岡貝地町公民館（平等寺の裏手）の横のこんもりとした塚が景清山、景清屋敷とよばれています。頂上に「愛宕神社」と「平景清公之霊地」の石碑がおかれています。

平景清は源平合戦で源氏の那須与一と共に平氏方の勇猛な武将として知られ、歌舞伎の演目にも登場する人物です。**これほどの人物の霊地がこんなにもひっそりと目立たなく存在しているのも不思議です。**

また石岡の歴史の資料にもあまり登場しない。平景清は一般には源平合戦後源頼朝に捕らえられ、その武勇を惜しんだ頼朝に命を助けられ、１１９６年に小田城（つくば市）の築城者である八田知家（ともいえ）に預けられたが、絶食して果てたと伝えられています。しかし異説も多く、ここの碑も**石岡市内の**金刀比羅神社の宮司が、愛宕神社をもって、猛勇な景清の霊を慰めようと建立したと言われています。

寿永年間（１１８３年）平維盛に従って屋島合戦に源氏の美尾谷十郎国俊と鏃（しころ）引の力競べをして、その剛勇をうたわれた。また、扇の的を射た源氏の那須与一と共に屋島合戦の双璧を飾ったが、平家滅亡の後、源頼朝に従った。後に常陸国守護八田知家に預けられたが、食を断ち、建久七年（１１９６年）三月七日に命を終えた。（石岡の歴史と

文化より）

また石岡にはこの平景清が、この石岡の地で生れ、この近くの府中六井の一つ「室ヶ井」という湧水のところで産湯をつかったという言い伝え話が残されています。

平景清は平氏で呼ばれているが、藤原氏が本当であるとされ、平氏は元々平国香（くにか）がその祖で、国香の父高望王が平氏を賜り、上総介として上総（千葉県）にやってきたことに始まる。国香は上総（千葉）から常陸（茨城）へ勢力を拡大したが、将門の乱で殺されてしまう。この後、この平将門を討ったのが、国香の子「平貞盛」と後に百足退治で有名となる俵藤太こと藤原秀郷（ひでさと）である。景清はこの藤原秀郷流伊藤氏の流れをくむ上総介「藤原忠清」の7男として生まれたと言われている。

この景清が産湯をつかったとされる「室ヶ井」は冨田町より兵崎へ通じる小道の東方、びんづる谷津の中にあったとされるが国道6号線の下に埋まってしまった（貝地交差点近く）。

（参考）各地に残る景清の伝承

・清水寺（京都）：源頼朝の命を狙って失敗し捕えられたとき、「源氏の世は見られぬ」と自らの目玉を刳り抜き奉納したとの伝説がある。また景清が自らの爪で石を彫って作ったと言われる景清爪形観音が残る。また、仏足石は景清の足型であるという伝承も伝わっている。

・秋芳洞（山口）：壇ノ浦の戦いに敗れた景清が身を隠くしたとされる「景清洞」がる。

・生目神社（宮崎）：景清が日向に下って、この地に僧侶として閉居していた。歿後、景清公の活けるが如き霊眼を祀ったとされる。一説には源氏の隆盛を目にする苦しみから逃れるために、自分の両眼をえぐって空に投げた。そのため御祭神として、景清の両眼が祭られているとされる。

・景清廟（宮崎）：源氏に対する復讐心から自分の目をくり抜いて盲僧となった平景清の霊を祀っている。また、景清の娘人丸の墓や、景清が使用したという硯石がある。

・景清の墓（鹿児島県曽於市）：壇ノ浦の戦いに敗れた後、平家再興を胸に秘め、源頼朝の命を狙っていたが、暗殺に失敗し、捕らわれの身となる。景清の武勇を惜しんだ頼朝は命を助け、九州に流し日向国、宮崎を経てこの地に移り住み、没したところと伝えられる。

・景清息女の墓（熊本県岡原村）：父・景清を追って岡原村までたどりつき、景清の死を知って自害した娘の墓という。

・鹿嶋市棚木には景清の娘「人丸」が景清の守り本尊を背をってきて、霊を弔うために堂宇を建てたといわれている「大福寺」がある。

源平の頃征夷大将軍の言葉に見られるように常陸国以北（現東北地方、陸奥）は中央政権の支配下にはありませんでした。このため日本列島の東端がここ常陸国であり西端が日向国（宮崎）となります。このように都から見ればこの両端に景清公の伝説が残っていることになります。謎も多く、幾多の演目に登場した人物ですのでどこからが作り話かはよくわかりません。しかし、ほとんど知られていないここ石岡の景清公についても、もう少し目を向けても良いように思います。最後に預けられた「八田知家」は従兄弟である常陸大掾氏（多気義幹）を北条時政と共に曾我兄弟の混乱につけ込み換言をもって罠にはめて領地を奪い常陸の守護に補任した人物です。しかし、大掾氏は多気氏にかわり同族の吉田氏（馬場氏）が継いでいくことになります。

9、手子后神社と中津川

神栖市波崎にある手子后神社（てごさきじんじゃ）は常陸風土記に書かれている童子女（うない）の松原の話に出てくる松になった女性（古津松）を祀っていると言われ、これが鹿島大神（タメミカヅチ）の娘ともいわれているとされています。

石岡市にもこの手子后神社が舟塚山古墳の近くにあります。場所は舟塚山古墳のある台地（中津川）と同じ所に建っています。

6号国道のバイパス工事がすぐ近くで行われています。神社は3つ並んでおり、向かって右から「素鵞神社」「手子后神社」「梨ノ木稲荷神社」です。この神社の横には古い石像や平たい石板がゴロゴロしています。

この辺りも舟塚山古墳群の一角なのでしょう。古墳の石棺などの一部もありそうです。

三猿が彫られた庚申塔などもあります。

この神社の祭神は童子女の松原に出てくる男女の霊（奈美松（なみまつ）霊と古津松（こつまつ）霊）です。

この辺りに松林はありませんが、舟塚山古墳も昔は古墳の上は松林だったと言われています。

一番左側は小さな社にとたんの屋根の覆いがかぶせられており、梨ノ木稲荷神社です。

稲荷神社ですので入口にはキツネ像が置かれていました。梨ノ木という名前も少し変わっています。昔の山に生えた梨は結構堅い実がついたようですのでどのような意味合いがあるのでしょうか。

神社のある場所は石岡市中津川字上ノ宮というようです。宮とはどういう意味でしょうか。

古代の地形を考えると流れ海（現霞ヶ浦）を通って常陸国府（現石岡）に来ようとした時に舟でこのあたりに上陸したのかもしれません。

しかし、舟塚山古墳、愛宕山古墳などは結構高台にあり、この流れ海の水面まで崖が続いているような地形です。

高台から少し下った道沿いに中津川公民館がありました。この公民館に瓦屋根を持つ小屋風の建物が3つならんでいます。

一番左が「子安神社」真ん中は「???観音堂」、一番右は「花蔵院」と書かれていました。

これらは、この辺りにあったものをここに集約したものかもしれません。

神栖市の手子后（てごさき）神社とこちらの神社との関連はわからないが、茨城県に残された手子后神社はどうも古墳時代の民俗的な何かのつながりがありそうに思われます。

民族芸能の話（4）

木下明男

労音の中で学んだ（日本音楽の話）に次いで、（民族芸能の話）について紹介いたします。日本音楽の話も今回の民族芸能の話も、タカクラ・テル先生から教えて頂いたお話しです。

私は昭和40年代、品川区の大企業（NIKON）で働いていました。会社に入社した頃は、1960年の安保闘争の真っただ中でした。その頃、安保闘争の中で団結力を身につけた労働者は、みんなが持っている諸要求を実現させ、明るく働ける職場になっていました。諸々のサークル活動も盛んでした。私も其の頃先輩から誘われ労音の活動に。

それから間もなく、組合弱体化政策の一環として、新賃金制度（会社職制の強化）導入が計られ、組合の分裂策動が行われました。会社側の組合分裂策動により、人間関係や様々な愛憎を経験した私は、社会のあり方に興味を持ち始めました。そんな折り、サークルの代表として、労音の地域活動に参加するようになりました。北海道函館労音との交流会に参加したのもこの頃で、生涯をかけて音楽運動に参加するきっかけにもなりました。そして、何のために音楽運動を進めるのかの勉強が始まります。そんな時に学んだテキストから…。

（4）日本民族の成立と演芸の発展との関係

勤労人民の大部分が開き盲だった。中世以前の社会では、大多数の国民は文学の読者になれなかったので、文字は文字を知っている極僅かの支配層に独占されていた。勤労人民の文学的要求は、専ら歌、踊り、簡単な演劇等で満たされおり、その基礎は民謡だった。一方支配者である貴族や高級武士も、自らの歌、踊り、演劇を発達させた。

階級分化が進むにつれ、人民的な演芸と支配者的な演芸との区別が段々酷くなり、内容も形式も大きな違いが生まれた。特に形式では楽器が大きく違っていた。人民的な演芸は、笛、太鼓、鉦、笙等を使い、支配者的な演芸は、笛、太鼓の他に、琴、琵琶、笙、篳篥等の外国から伝わった楽器を使った。

こうして、人民的演芸は「田楽」を中心に、支配者的演芸は「猿楽」を中心に其々発達し、「部」や「座」の制度で厳しく取り締まられ、人民的な演芸と支配者的な演芸とは、また其々地方的に大きく違った。つまり、日本の演芸は一方では階級的・身分層的に、一方では地方的に縦と横とに大きく分裂していた。そこへ、室町中期以後の大きな危機が現れ、全国的な大動乱を通じて、田楽と

猿楽が互いに交流をして影響しあい、また演芸の地方的な要素も交通の急な発達により、交流が進み影響しあうようになった。

こうして、日本の演芸が封建制の危機を通じて、民族的統一の方向へ大きく向かう道が開かれ、その結果二つの代表的な演芸が生まれた。「狂言」と「能楽」です、猿楽の影響を受けて発達した人民的な田楽が狂言へ、田楽の影響を受けて発達した支配者的な猿楽が能楽へと、それまでになかった新しい演芸が生まれた。

特に狂言が大切で、歌舞伎や人形浄瑠璃、その他の後の演芸や文化の誕生に大きな影響を与えた。狂言は高い革命性を持っており、能楽の厭世主義は封建制の危機に、支配者である武士階級の抱いた思想を反映したが、狂言の楽天主義は同じ封建制の危機に対して勤労人民の抱いた積極性を正しく反映している。時の支配者に対して真正面から、これ程激しい罵倒と諷刺を浴びせた実例は他にありません。

「罷り出でたる者は隠れもない大名でござる」と言って登場する大名は、全て馬鹿で、滑稽な失敗が大部分の作品のテーマです。「武悪」と言う作品、武悪と言う家来が出仕しないのを大名が怒って、太郎冠者に命じて斬らせようとする。太郎冠者は友人の武悪を助け、都から逃がし大名には首尾良く斬ったと報告する。大名は太郎冠者を連れて清水へ参拝に、そこで最後の参拝に来ていた武悪と遭遇する。大名は「あれは武悪ではないか」太郎冠者は「私が斬ったので武悪ではない」といって、そっと武悪の処に行き幽霊になれと言い含める。

大名は幽霊の武悪から地獄模様を聞き出すが、武悪は大名の父がたくさんの戦争で罰が当たり修羅道に落ち苦しんでいる話をし、刀や扇子を頼まれたと取り上げ、大名をあの世に連れて来いと言われたと言って大名を追い回すところで、狂言は終わっている。

この作品は、俳優の磨き上げた演技と結びついて、今でも深い感動を与えるが二つの点からきている。

①作者が愚かで無道な大名をやっつける家来の立場に立っている。

②幽霊や地獄等の迷信に脅かされるのは、人民に非人間的弾圧を加える支配者で、迷信はそれらの弾圧が支配者の心に映った罪の意識であって、人民はかえってそれを種に支配者に攻撃を加えると言う取り扱いをしている。

極めて階級的な位置にたっており、また、極めて唯物的な見方をしている。能楽は殆どの作品に、幽霊・神・仏等の超自然の存在が現れて、それが出てこなければ問題が解決しない。狂言にはこういうものは全く出てこないし、出てくるときは「朝比奈」や「八尾」の閻魔大王等のように、必ず罵倒の対象になっている。「花子」と言う作品、ある大名が美濃の国で花子と言う遊女と仲良くなって、都へ連れていく約束をする。花子が北白川に宿をとったと知らせるが、大名の妻はやきもち焼きです。一人で外へ出られず、困った挙句、持仏堂で座禅をする事にして、太郎冠者に座禅襖を被せて花子に会いに行く。妻が太郎冠者の偽物を見破り、怒って今度は自分が変わって座禅襖を被って座る、そこへご機嫌良くほろ酔いでかえった大名は、花子とののろけと妻の悪口を言い、妻が飛び出し大名を懲らしめる。

これも非常に優れた作品で、次の二つからきている。

①支配者の腐った生活を容赦なく暴露している。

②当時、高級武士の間で流行していた形式的な座禅の基礎であり、武士階級の思想の源だった座禅に、痛烈な諷刺を加えている。

禅宗は、鎌倉時代の初め、封建制の政治権力が確立した時に、天台・真言の二宗に変わって、支配者である武士階級の中心の指導思想となったもので、封建制度が発展している間は、ある程度新しい宗教としての健全さを保っていた。しかし、封建制度が発達を止め大きな危機に見舞われると、禅宗もすっかり腐敗して中心の行事である座禅も全く形式的になり、形式であるから大いに流行していた。禅宗と座禅をこのように暴露し罵倒したことは、当時の政府と支配者に対する諷刺です。

このように日本封建制の第一の危機は、日本を民族的に統一する大きな役割を果たし、文化の面でも統一して質的に発展させる役割を果たした。江戸時代の中期以後の第二の危機は、文学の芭蕉・近松・西鶴、美術の浮世絵等の、非常に優れた近代的作品を生んだ時代で、演芸の方面では三味線音楽、歌舞伎、人形浄瑠璃等が素晴らしい発展を遂げた。近松の「曽根崎心中」・「心中天の網島」・「冥途の飛脚」等の優れた作品が代表しているように、封建制の危機によって悲劇（心中）に追い込まれた小市民の生活を哀切が限り無い調子で歌い上げ、日本の近代現実主義（レアリズム）の源を創りました。人形浄瑠璃が、四国や瀬戸内海の島から出て、大阪で発達し全国へと広がっていった事が、この危機を通じて文化の民族的統一が大きく発展し偉大な質の向上を成し遂げた事を示した。地方の民謡が次第に中央の都市で歌われ、都市の「わらべ歌」や「かぞえ歌」等も地方で歌われるようになって、それらの交流を通じ民謡が大きく発展した。「松の葉」、「松の落葉」、その他の

民間の歌のテキストがこの時代に出版されているが、それはこういう必要からです。講談、落語、祭文等多くの大衆演芸も、この時代に発達し全国に広がりました。

このように、この時代の演芸は、一層民族的要素を深めて新しい発展を遂げましたが、同時に本質的な弱点を持っていた。近松の心中物が示しているように、封建制の危機から生まれた悲劇を、単に封建的な義理人情の範囲の取り扱いで、封建制と妥協し悲劇の真の原因である封建制と闘い、打ち倒そうとする革命性を狂言から受け継げていません。その原因は、これらの文化を指導した当時の町人（資本家）が、厳しい「鎖国」の元で資本主義を本質的に発展させる事が出来ず、力が弱く経済的には成長していても、敵である封建制を自分の手で打倒す気力を持つまで成長していなかった。それで、武士階級の指導する封建的な思想の影響を演芸から一掃する事が出来なかった。演芸の民族的要素を高めるためにも、大きな妨げになった。何故かというと、当時の全ての勤労人民が封建制の野蛮な搾取と圧迫の元に苦しんで、危機の打撃を直接受けていたので、封建制との戦いは民族的な切実な要求で、ハッキリとこの立場に立たない限り、演芸の真に民族的な内容も形式も想像できなかったからです。然しこの不幸な状態は、其れから後も長く続き、今もまだ大きく残っている。こうして日本民族は、その成立の過程を進む中で、その成立を妨げる封建的要素と絶えず激しい闘いを続けなければならず、その闘いは今も終わっておらず、従って文化の面でも、真に民族的な文化を打ち立てる闘いは今も続いている。

県指定文化財（25）

兼平智恵子

現在、石岡小学校敷地内にあります、石岡市ふるさと歴史館では『史跡指定記念瓦塚窯跡展』が行われています。平成二九年八月一日（火）～十月二九日（日）午前十時～午後四時三〇分。月曜日休館（月曜が祝祭日の場合その翌日）入場無料。

瓦塚窯跡は石岡市部原（へばら）に位置する、標高130ｍ程の高芝山の南西裾に築かれた窯跡です。

石岡はかつて国府がおかれ、国庁や国分寺僧寺、尼寺が建立された際その屋根に葺く瓦類を製造していました。

今まで瓦塚窯跡は県の指定史跡（当会報、第一二三号、二〇一六年八月で紹介）でしたが、指定後も継続的に調査が行われ、その結果長期間操業された35基もの窯跡が存在すること、常陸国分寺などに葺く瓦をその確立期から終焉まで一つの遺跡で確認できることが判明し、これらの点が全国的に貴重であると高く評価され、平成二九年六月一六日、国指定史跡となることが決定しました。

山の南西斜面を利用し、温度を上げるため日当たりのよい斜面に窯を設置していると言う理にかなった場所から遺跡が確認されているという事になります。また、遺跡付近には国府にむけて瓦会街道が通じていて、この道を通って瓦が運ばれたといわれ、瓦塚から国府までは直線距離で10ｋｍと言われています。

軒先に葺かれる軒丸瓦・軒平瓦には蓮華文や唐草文などの文様がついており、その文様の変遷から年代がある程度わかっています。

どうぞ、奈良・平安びとの偉業と瓦や土器の温もりをご覧下さいお待ちしてます。

今回の県指定文化財紹介に入ります。

○真家みたまおどり　無形民俗

指定　昭和三三・三・十三

八郷地区真家では毎年八月一五日に、念仏衆が新仏のある家を回って念仏歌をうたい、みたま踊りを踊って死者の霊を慰めている。踊りには七月の舞、二の谷の舞、十六拍子の舞の３つがある。

踊り子は小学生から老人までの老若男女で、いずれもそろいの浴衣にたすきをかけ、花笠（笠にオコマと呼ばれる房飾りをつけて顔を隠しますが、これは仏の姿を表している）をかぶり、白足袋・手甲をつけて踊る。この踊りの唄は盆踊り御詠歌といわれる念仏歌である。

真家みたま踊りは、伝えによるといまより凡そ八百年前平安朝の末期、大和の国の本山長谷寺から、その末寺である当地の仁王山不動尊福寿院に来た僧侶が、村人に念仏踊りを教えたのがはじまりだという。以来、村人は盆になると亡き人の霊魂を供養するため、寺の庭に集まり夜を徹して踊るようになった。さらにその後、入仏された新しいみたまの供養のため、新仏のある家を訪れて踊るようになった。これがのちに衰えて五年に一回行われていたが、現在はまた復活して毎年踊るようになった。

みたまおどりは現在、県指定無形文化財（民俗）になっていますが、それとは別に「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」として国選択無形民俗文化財にも指定されています。

この踊りは『くり込み』と称する行列で踊り場に繰りこむもので、先導が提灯を持ち、続いてまといい、みどし、虎の皮、とうしん、ぐんばい、さいまら、びんざら、しゃぐま、そのあとに踊り子が続く。

そして囃し方として太鼓、笛、歌い手（老人）の順に入場します。踊り子は扇子を持った「七月の舞」を一番とし、二番目の手踊りである「二の谷の舞」、三番目の「十六拍子の舞」と続きます。輪に成っている踊り子の外周を「さいまら」と「ぐんばい」が、それぞれ反対回りで踊り、交差をする度にタッチします。

三つの舞が終わると続いて「となえ」が唱和される。となえは「願以此功徳　平等施一切　同発菩提心往生安楽国」の経文である。となえが終わると、この家の新仏への供養が終わる。踊り子たちはくりだしと称する行列によってその家を去る。

このようにはじめは布教のための手段とされた念仏踊りであるが、これが次第に祖霊を慰める供養の踊りとなったのである。

盆踊りはもともと仏教信仰に根ざす踊りであった。しかしいつか信仰から離れて男女の歌垣などの様相から、大衆のたんなる娯楽物となり、納涼踊り、社交踊りと化したのである。

以上「真家みたま踊り　昭和六三年八月　真家みたま踊り保存会　」より一部抜粋させて頂きました。

当日八月十五日は途中から大雨に見舞われ、園部地区コミュニティセンターで行われました。

この時代に、先祖のみたまと現世に生きる人々の心が踊りを通じてとけあって、地区を愛し、先祖を尊ぶ伝統が守り続けられていることに、深い感動を頂きました。そして子供からお年寄りまで、おそろいの衣装で息のあった踊り、色とりどりの「オコマ」の揺れる光景、美しいひと時を有難うございました。

・おさなごの手おどり凛として青年清清しく　智恵子

何処へいっちゃたの

伊東弓子

まあちゃん、御免んね。イーちゃんがいなくなったの。婆ちゃんも淋しくて仕様がないんだけど、まあちゃんには申し訳ない思いでいっぱい。

あれは、十二月の始め、yお母さんと用事を済ませてもうすぐ家という目の前に小さな固まりがあってびっくり。それは事故にあって酷い怪我をした猫だった。

下顎と皮が剥がれ、目が開かず動きもしない。お医者も今夜持つかどうか、という。生命力も強かったのだろう。みんなの祈りも届いたのだろう。翌日には目を開け動き出し、一緒の生活が始まった。お母さんの協力と、まあちゃんからの助言も貰い、日に日に元気になって剥がれた皮の手術もできると、普通の生活が出来るようになるという喜びでいっぱいだった。

イーちゃんと呼んで家族の一員になった頃、汰練（たいれん）と婆ちゃんが忠清に十日も出かけたので、まあちゃんが面倒を見てくれたね。傍に置いて夜中も日中もイーちゃんの要求にそって世話してくれたまあちゃんに「いなくなっちゃった」と、簡単には言えない。

八月に入って間もない日、特別変わったこともなかったように思うけど、あの晩、外へ行ったきり帰ってこなかった。いつものようにオシッコ、ウンチもし、ご飯も食べた。「後はねんねだね」と言い、「私等もそろそろご飯だよ」と話しかけると「ニャー」と返事なのか答えてくれた。台所の出口から出ていこうとしていたので「イーちゃんもねんねだよ。もうお出かけしないよ」と声をかけたが、その時には返事がなかった。あの時、連もれ戻しに行けばよかった。今もあの暗闇が重く伸し掛かって、胸が締め付けられ、目頭が熱くなる。

「イーちゃんおいで」と声をかけても返してくる声もなく姿も見せないで行ってしまった。持っていた茶碗を置いて外に出て、何度名を呼んだろう。裏山に向かって、隣りの家境の草叢を揺すってみた。西側の下の畑に降りてみた。いつもなら二～三回呼べば必ず返事していたのに、桎梏かと思う程呼んでいたが、呼ぶ声を後目にして出て行ってしまったのか。

床に着いてからも思い出していた。兄ちゃんの道具置場に行って狭いところに入ってしまうのが恐ろしい。出てこられなくなってしまうのだ。何度か物を動かし助け出したこともあった。畑境いの草が茂っていた所で、下の畑に落ちた時の驚きよう。パアッと起き上がり山へ駆け登ろうとしたのを抱いてやった。事故の衝撃を思い出したのではないかと強く抱いてやった。

つい二～三日前、隣りの女の子が遊びに来た。話が出来るようになって「ニャーニャ、遊ぼ。ニャーニャ」と暫く母親と私、女の子と猫のそれぞれの良い時間だった。あの子にも猫のいなくなったのが分かるだろうか。あの子の心の中にも何か感じるだろうか。

毎朝起こしに来た声もなかった。いつも横になっている床の所にも姿はない。いつ戻って来てもいいように玄関も、台所口も少し開けておいたが戻ってない。一番心配な道路に出て轢かれていないかだ。安堵して胸を撫で下ろしながら、夕べ思ったのは気休めだったのだ、と改めて思い知らされた。

夕べ残した少しのご飯もそのまま。便器も汚れていない。兄ちゃんも「帰って来なかったのか」と一言いって仕事に出かけて行った。いづみも知

ってか知らずか、ただ私を見て散歩のお強請りをしている。朝食前に一回りしてみたが姿も声も返って来ない。こんなに辛い思いはここ暫くなかった。人と犬、猫の暮らしの楽しさが一変した。今迄にない経験を味あわせてくれた幸せは壊れた。

いづみの散歩を利用してイーちゃん探しが始まった。イーちゃんのタオルの臭いをかがして出かけた。裏山の辺りは毎日歩くコースにいれた。特に茂みが酷いので掻き分けながら頑張った。共同墓地の中も歩いてみた。水を飲んだりお盆のご馳走を頂いているかもしれない。家並みの所も名前を呼んで歩いた。農家の広い屋敷には庭に寝そべったり、農機具の上で寝込んでいる姿を見た。伸び伸びして羨ましい。どの猫もイーちゃんではない。毛並みも大きさも顔も、表情も違った。

毎日思い詰めている所為かある朝そっくりの猫にあった。何気なく見たビニールハウスの草の中に首を出していた猫。薄茶色の猫に思わず「イーちゃんでしょう」と声をかけていた。声も出さずちょっと警戒している表情。右耳の周りも白くない。そのうちフゥーッと向かってきそうだった。違ったようだ。帰り道で覗いてみたが、もういなかった。

あれから二十日あまりになるが、明るい情報は何もない。厭なことばかり考えてしまう。雨の日はどうしているだろう。強い猫に虐められていないだろうか。死んじゃったんじゃないか。道が分からなくなっちゃったのかな。不安な気持ちでいた頃、朝の散歩でいづみが見つけたもの。それは是骸骨に襤褸布がくっついているようだったが、それは皮だった。そこに後足の片方がぶら下がっていた。まさかこんな姿に。いや違う。未だ一ヶ月経たないと自分に言い聞かせよくよく見た。鼬の姿だった。いづみはその骨を齧り続けていた。あの日からもう何ヶ月も経ったように思う。無常の世を思い知らされている。

兄ちゃんも帰ってくると「いたか」の一声。九ヶ月家族の一員の一匹が欠けた事の空白は、そう簡単に埋めることはできない。兄ちゃんの傍で寝入り、朝方は二階の私の所へ起こしに来る。夕方は台所で、私に絡みついて、食事を強請ったり、座って落ち着いて欲しいとせがんでいた。

私がいるときは、庭に出して草を噛み、いづみと戯れ、木登りをしていた。留守にする時は、網戸からいづみや車が見えるようにして、隅にはテレビをつけておいた。ある時、そっと覗いてみたら、テレビの画像の動きをジッと見ていた。

下顎の傷もすっかりよくなって骨も魚もよく食べていた。可愛い仕草に癒され、異様な動きにも驚かされた。本来は自然の中で生きていくのが一番だ、と思いながらも、壁蝨が住みついていないか、事故の後遺症と思われる倒れるまで続く、ぐるぐる廻りのことの心配は頭から離れない。病気を持っているんだから早く戻っておいで、と願っている。

友や知人が慰めてくれるのも有り難い。命が終わりに近い時、姿を隠すといわれている。誰かが連れて行って可愛がってくれているよ。事故にあう前に飼われていた家に戻ったのかもしれないよ。一ヶ月もしたら帰ってくるよ。どっかで野垂れ死にしているかもよ。等と遠慮なく言う人もいる。

八郷（片野）の人が娘さん（石岡）にあげた猫が一ヶ月して帰ってきたという話も何日か前に聞いた。そうだったらいいな、と暑さの中にも秋風を感じさせるこの頃思う。

イーちゃん！　赤まんまが咲いたよ。

まあちゃん！　今年も青い朝顔咲いたよ。まあちゃん御免ね。まあちゃんと婆ちゃんを繋いでくれたイーちゃんがいなくなっちゃった。こんな切ない思いをしている毎日は、まあちゃんと別れた時と同じ気持ちよ。

婆ちゃんそんなことに拘っていてはだめだよね。まあちゃんも、イーちゃんも独り立ちしていくんだものね。

それでも「来たよ」と言ってくれる日があったらいいなと、毎日「イーちゃん」とあちこちで声かけしている。

東京湾最大の自然島「猿島」

小林幸枝

雨続きだった八月でしたが、東京湾最大の自然島、猿島観光を計画していた十三日は日ごろの行いの良さが報われたかのように晴れて暑い夏になった。

猿島は、神奈川県横須賀市にある東京湾の自然島としては一番大きな島です。

猿島の由来は、建長五年（１２５３）五月、日蓮上人が、房総から鎌倉へ渡る途中嵐にあって、船の進む方向が分からなくなった時、近くの島に避難したところ一匹の白猿が現れ、島の奥に案内してくれたということから猿島と呼ばれるようになったと言われています。

猿島は、幕末から太平洋戦争終了まで、東京湾の首都防衛拠点となっていました。幕末の１８４７年に、江戸幕府によって国内初の台場が造られました。明治に入ると、陸軍省・海軍省の所管となり、東京湾要塞の猿島砲台が造られました。

岩盤を掘って煉瓦で　覆った要塞跡は今も残っ

ており、フランドル積み工法は日本では四件だけで、貴重な建築史跡です。煉瓦や壁に生えた苔が木漏れ日に輝いていて、とても幻想的な風景を作っていました。

兵舎や弾薬庫などもそのままの姿で残されております。

日蓮洞窟（古代住居跡）という洞穴がありますが、現在は立ち入り禁止となっていて、見ることはできませんでした

猿島は、一時間ほどで一周することができますが、要塞内は階段の上り下りが多くて、猛暑となったこの日は、大変きつい島めぐりとなりました。

猿島には、小さな海水浴場もあり、バーベキューや釣りなども楽しむことができます。

猿島は、映画「天空のラピュタ」を連想させるとしても人気を集めています。また「仮面ライダー」の撮影ではゲルショッカーの基地があるとされたことでも知られています。

猿島へは、三笠桟橋から船が出ており10分ほどで着きます。小さな島ですが、見どころ、楽しみどころ満載の島でした。

【風の談話室】

《特別寄稿》

命の河を遡り

田島早苗

（7）心の奥の闇

長田家の裏には細い道を挟んで、小さな池があり、広い草原や畑が続き、その先に空襲の時和子と一緒に田んぼの中へ避難した人たちの家がぽつんと建っていた。

早紀が小学二年生の春、母加代の仲良しだったその家の主婦が、農協で働いていて、うどん作り機械のベルトに巻き込まれ亡くなるという、痛ましい事故が起きた。同級生の母親の無残な奇禍は、早紀が初めて向き合った身近な死だった。

その後加代は遺された四人の子供達を気遣い、何かと相談に乗って来た。

七月の岐阜空襲で無一文になった長田家に、手を差し伸べてくれたのはその家の父親だった。

土間を挟んだ内職の仕事部屋を取り敢えず一家が寝泊まりできるように片付け、子供達の古着や寝具迄整えて、受け入れて貰い、いくら感謝しても足りない有難さだった。

疎開していた祖父が健三に連れられて名古屋へ帰り、肩を寄せ合って間借り生活乍ら長田家の再出発が始まった。

然し八月の初め、広島に続き長崎にも怖い新型爆弾が落とされた。

たった一発で市のすべてが焼き尽くされた噂が日本全国を走り抜け、本土決戦が叫ばれ始めた八月十五日、「正午から、天皇陛下御自ら賜る玉音放送を、国民全員が聞く様に」と通達があり、抜けるような青空の下にラジオを据え、集まった老若男女は、現人神のお言葉を、直立不動で待ち受けていた。

雑音の中から切れ切れに聞こえるお声は甲高く意味が不明だったが、「耐えがたきを耐え、忍び難きを忍び、・・・・」のお言葉に、戦争が終わったらしいと思い始めた人々は涙にくれるばかり。

「戦争が終わった、日本は負けたのだ！」中でも大切な肉親の命を、国の為に捧げた人々の怨嗟の涙は尽きることが無かった。

目標を失った人心は荒れ果て、食糧難は子沢山の家庭を直撃していた。

こんな無秩序な社会情勢の中、食べ盛りの子供を抱えた二家族が一軒の家に同居する事は、初めから無理な相談だった。

皆が気を使い過ぎ、疲れ果て、両家の間に目に見えぬ溝が深まって行った。

互いに、ささくれ立った心のやり場に困り果て、にっちもさっちも行かなくなって居た時、寺総代の仲立ちで九月から寺の本堂に仮住まいを許され、正に地獄に仏の喜びだった。

ここでも広い本堂を幕で区切って二家族が一緒に住むことに成ったが、広い本堂のお蔭で、右と左の端に分かれた二つの家族は、互いに知らない者どうし、ほとんど没交渉に過ごせて何よりだった。

その年の終わりには、狭いながらも家を新築して移ることが出来、ようやく、長田家の戦後が動き出した。

健作は、戦争末期に応募した予科練の試験に落ちたのはO脚のせいだと信じ「親の育て方が悪いからO脚に成ったのだ」と恨みを募らせるような生真面目で燃えやすい性格だった。運悪く、その頃大流行していた発疹チフスに罹り、せっかく本腰を入れて勉強ができるようになった〇〇工業学校を休む羽目になり、誰にもぶつけられない怒りを持て余す日々が続いていた。

その挙句、父から優しい言葉を掛けて貰った覚えもなく、愛されている実感が湧かないから「俺は父の子ではない」と妄想を募らせ、故もなく加代に当たり散らすことが多くなっていた。母がそっと涙を拭うたびに、健作の屈折した心の奥の闇

まで思い及ばぬ早紀は、「どうしてお兄ちゃんはお母さんを泣かせるの！」と詰問しては、怒り狂った健作に叩かれるのだった。強情な早紀は決して逃げなかった。座り込んで叩かれている早紀を見て、隣の小母さんが「早紀ちゃんは逃げればいいのに」と呆れ返る位、毎日のように荒れ狂う健作の姿は目立っていた。

怒りの矛先は早紀ばかりではなく、和子にも及ぶことがあったが、いち早く逃げ出す和子を追いかけて迄叩くことは無かった。

父健三は知り合いの傘問屋に傘の貼り方を教わり、その頃流行り出していた網代日傘を皮切りに、番傘・蛇の目傘まで貼るようになって行った。手間賃は安かったが、家族が協力して、何とか糊口をしのいでいた。

生活力の無い自分を棚に上げ、「これからは実力で自分の道を切り開いて行かねばならぬ」「学歴が物言う社会は終わったのだ」等と、折を見ては説教を垂れる父親に、子供達は密かに『説教親父』と言う称号を奉って、留飲を下げていた。

荒ぶる健作の心は中々安定せず、工業学校を卒業した年に、健三の知人の始めた事業、ビニール傘の修行の為名古屋へ出かけた。

学業の継続を断念した早紀は、メリヤスの編織工場に就職、検反係として働き出した。

給料のほとんどを家に入れ、みんなの助けになって居ると言う自負だけが支えだった。

工場長の信頼を得て張り切って働いていた早紀だったが、何故か満たされない心を、仕事に紛らわす日々だった。

一年が過ぎたころ新聞で、岐阜で一番大きな○○百貨店のエレベーターガール募集の記事を見て、矢も楯もたまらず、両親を説き伏せ応募したのだった。

難関を突破して待望の百貨店に就職した早紀は、バス代を節約するため、毎日県南の自宅から市の中央繁華街、柳ケ瀬まで歩いて通った。

ズック靴を履いて木綿の靴下の早紀を見た店長に、「エレベーターガールは、お店の顔です、ズック靴は困りますね、靴下も絹かナイロン製にするように」と言い渡され、初日から、前途多難な出発だった。

少し仕事に慣れた頃、エレベーターの前で宣伝販売をしている青年に誘われ、岐阜の養老の滝へ出かけた時には、妹の明子を連れて行き、失望を隠して、「可愛い妹さんだね」と言う青年の精一杯の御世辞を本気になって喜んでいる妹思いで、幼い早紀だった。

ちびでコロコロ太っている早紀は『小熊のコロちゃん』と呼ばれて皆に愛されていた。

総務課に属するエレベーターガールは、非番の時は、屋上のプレイランドを手伝うことが多く、屋上で客の写真を撮っている青年と話をするようになった。

何時も♪ユアマイサンシャイン♪を口ずさみ、当時人気絶頂の映画俳優によく似た容姿に密かに憧れていた早紀は、ある日、家まで送ると言う青年と連れ立って長い道のりを歩いていた。相変わらず本狂の早紀は、文学書から講談本まで、手あたり次第の乱読で、時には気取って哲学書などを抱えて歩く夢見る少女だった。

憧れの青年と歩きながら、まるで物語の主人公に成った様に幸せだった。然し、野原の中の一本道に差し掛かり、急に抱き締められた時、思わず大声で笑出し、図らずも難を逃れると言う、頭でっかちで未成熟だった早紀。

大勢の大人に可愛がられ、楽しい職場だったが、給料を丸々自分の衣装代に充てている同僚たちと、給料のほとんどを家に入れている早紀、あまりにも違う家庭環境の中で、これ以上働き続けることは出来なかった。僅か一年間の密やかな青春はこうして終わった。

次に早紀の選んだ仕事は既製服の縫製所だった。触った事も無かったミシンの扱い方から教わり、紳士ズボンを仕立てる技術を身に付け、三か月後には、家でズボンの下請け作業が始まった。

早紀が手掛けたのは背広の下の高級ズボンで、工賃も良かった。誰に気兼ねする事も無く、一国一城の主に成った気がして、日がな一日ミシンを踏み続けても疲れなかった。

夜になると青年学級に通い新たな出会いにも恵まれ、平穏な日々が続いていた。

和子は中学校を卒業すると高校進学を諦め、近くの紡績工場の寄宿舎に入り、持ち前の明るさで頑張って働き始めていた。

然し、健作がビニール傘の製造技術を身に付け、我が家で仕事を始めることに成り、長田家の平和が崩れ始めた。

名古屋では友人の息子と言う事で、あまり厳しい修行ではなかったが、健作にとっては我慢を強いられる日常だった。早く一本立ちしたい一心で頑張り通して来たと言う思いが強く、親や妹たちを意のままに従わせることで、自分の存在感を示そうとしていた。

特殊なミシンでビニールを接ぎ合せ、傘の形が出来上がると、雨が漏らないよう天辺に被せるビニールを張り付ける。

ここまでは、特殊ミシンの発する熱で加工する仕事だったが、最後に傘に仕上げる時、骨の先を

差し込む小物を糸で取り付ける手作業が待っている。

早紀も特殊ミシンの操作を覚え、両親は手作業に駆り出され、皆健作のご機嫌を損なわぬ様にピリピリしながら、一生懸命働いていた。名古屋の工場の下請けで、傘表の加工までだったが、流行に乗って仕事は途切れることなく、収入も増えて行った。

然し、工賃を手にすると、そのまま遊びに行くことが多くなり、帰って来た健作のポケットにはほとんど金が残って居なかった。

早紀が文句を言うとすぐ荒れ狂う健作、涙をこぼす母、黙って自分の世界に逃避する父。

小学校高学年の明子はそんな暗い家庭の中で、息をひそめて過ごしていた。

健作は、いくら遊んでも心は満たされず、やがて青年会に入って、近所の仲間と色々の活動に加わるようになり自制心も生まれ、酒さえ飲まなければ優しい兄だった。

その頃の青年会活動は、会合の後で飲み会になる事が多く、健作は酒が一定量を超えると、心の奥の闇に操られるように様に荒れ始める。こうなったら誰にも手が付けられない。酒癖の悪い健ちゃんと、有名を馳せるようになり、楽しかった早紀の青年会は灰色に。

やがて、長田家から逃れる方法を模索し始めた早紀だった。

（続く）

《読者投稿》

やさと暮らし（7）

さと女

梅雨の間は晴れ続き、明けてからは雨が続き8月に入ると秋雨秋風、どうなっているのかな？

・4日ぶり

喜び悲しみ色々あった4日間、高崎での叔母の葬儀に始まり、横須賀の義兄の見舞い、立川のイベント、以前の職場の記念パーテイ、友人の施設訪問、など無駄なく過ごした。駅のコインロッカーも何度も利用した。いつの間にか400円になっていた。最後の日は川崎駅地下街で友人二人と食事をして別れた。川崎駅周辺もすっかり変わり、駅前には川崎で生誕の坂本九の碑がたっていた。猛暑日の4日間、走り回って大汗をかき、帰路に着き筑波山が見えた時にはホットした。

・かぼちゃ

朝から気温が上がる中、2時間程雑草と戦う。雑草の中から野菜たちが顔を出す。生ごみから芽をだしたかぼちやの収穫を。まだ早そうだったがイノシシにやられないうちに…。この辺りでもことしはイノシシの被害がでて、お隣さんはジャガイモが全滅。マルチは大きな足跡で敗れていたと言っていた。我が家の畑にも足跡が。その後、お使いに出てあまりの暑さに、思わずカフェに、ママとお喋りしながら一息ついた。

・別れ

余命数か月（義兄）。ホスピスへの道をえらんだ姉。ホスピスに入るにあたっては病状をきちんと話さなくてはならない。辛い事だが家族が現状を話しそのうえで転院した。まさかその日の夜中亡くなるとは…。ホッとしたのかな、僅か40日余りの闘病生活だった。義兄は子供時代から犬が好きで、趣味と仕事が一緒の様だった。特に大型犬が好きでシェパード、ドーベルマン、ブルドックなどの訓練を行っており、多くのチャンピオン犬を育てた。最近は小型犬などの預かりをして楽しんでいた。葬儀ではワンちゃん達からの花束やメッセージが届いていた。

・お盆近し

ミソハギやホオズキを見ると、子供の頃のお盆の時期が甦る。同時に大きな丸テーブルの上に並べられたトウモロコシやソーメン。従弟たちと走り回った記憶が…。今年もいつの間にかお盆の季節、お隣さんはもうお墓の掃除をしていた。翌日早朝、大きな音が聞こえてくる。外に出てみると無線の小型ヘリコプターが飛んでいる。田んぼの消毒だった。先日にはドローンでの消毒。稲の成長は早い。5月始め田植えをして、もう稲穂は頭を垂れ始めている。もう1か月もすると稲刈りかな…。

今年もホタルは姿を見せなかった

・有明フェスティバルへ

フェスティバルの会場に入ってすぐ目についたのがボンネットバス。八郷の田園風景の中を走ると言うので試乗する。昔は羽鳥駅から福原駅の間と、羽鳥駅から柿岡車庫の間をボンネットバスが走っていた。当時通勤、通学時間帯は満員だった。揺れ具合を感じながら当時を想い出した。

会場はさまざまなコーナーがあり、ブラブラしながらテントの中を覗いて歩いた。6時から夕暮れコンサート。オカリナやコーラスを楽しみ、いよいよ花火。久々に首が痛くなる程の距離で花火観賞を。あちこちでバーベキューなどを囲み交流の場が広がっていた。

・お盆近し

お盆が近い。我が家のお墓は10軒程の共同墓地。8月7日、早朝5時に集まり、掃除をするのだが、今回すっかり忘れていた。思い出し、冷や汗をかいたが、過ぎたことは仕方がない。そういうわけで一人墓掃除に行った。周りはキレイになっていたので、墓石など磨いて帰って来た。朝5時なのに、汗が滴り落ちる。タバコ農家さんはもう作業していた。タバコの葉っぱを折る、ポキポキという音がリズミカルに響いていた。ご近所さんよりたくさんのゴーヤが届いた。2本ほど酢と麺つゆのつけ汁につけ、漬物代りに。朝食時はゴーヤにリンゴとバナナをミキサーにかけ、牛乳を加えて飲んだ。甘くてとても美味しい。我が家からのお返しはみょうが。日々物々交換です。それにしても前日との気温差10度も、体が戸惑っています。ゴーヤで身体を整えましょう。

・一年たった

FBを始めて一年。日記も家計簿も3日と続いたことのない私だったが、始めたからには1年間は書き続ける。密かに決心をしたが、パソコンを操作するのは初めて、文字を打つのも何をするのも手強く、今日でもう最後にしようと何回も落ち込んだ。でも私のつまらない発信にも「いいね！」を押してくれ、友人たちが励ましてくれたし、決めたことは一度ぐらいやり遂げたかった。そういうわけで、入院時（手首の骨折）と親戚の不幸で出掛けた時を除いて毎日発信した。

たくさんの「いいね！」を押して下さったお友達、FBで知り合ったお友達、有難うございました。これからも発信を続けていきますので、どうかよろしくお願いいたします。

・お盆の中日

雨模様の肌寒い天気。お盆のお中日。最近の葬儀はセレモニーで行われる事が多いが、新盆詣りは自宅に行く。大体の見当をつけて出かけたが、少し迷った。6件のうち2件は、うっかり家の前まで行ったが、来年の様だった（気が付いてよかった）。メ農家さんは主が亡くなってから、田んぼは草ぼうぼう。亡くなるということはこういう事なんですね。なんか、悲しくなった。夕方、ご近所さんの訃報がはいった（96歳だった）

・みたまおどり

お盆の15日朝から小雨ふるなか、真家のみたまおどり保存会が新盆の家をまわる。福寿院に伝わる念仏踊り。御詠歌と踊り。竹で出来たササラ、笛、太鼓。雨にもかかわらず、カメラを抱えた方達も大勢集まっていた。今回は馬滝登り口の明園寺で行われた「みたまおどり」の奉納を見学した。

まるで秋の長雨。8月に入ってから太陽を見ていない。お米農家さんからため息が聞こえる。これでは刈り入れが遅れるなあ～。挙句の果てイノシシも出没していると…。これからイノシシ除けの薬をまくという。一部稲穂の倒れた、黄色く色好き始めた田んぼを眺めながら、お天気を気にしていた。今日は太陽が拝めるかな…。

養生日記

堀江実穂

・某月某日

内原のジャスコに友人と出かけてきた。9月に結婚式に呼ばれているので、その時に着ていく洋服を見に行ったのだった。

洋服屋の店員さんたちは皆、スタイルのいい友達に近づいてきて、いろいろ薦めるが、私には声をかけてこない。この時ばかりはデブは損だなと思った。

一軒の洋服屋さんで見ていると、ひとりの店員さんがやってきて、あなたにも合う服がありますよ、と言って、紺色の素敵なドレスを出してくれた。試着してみると、なんとピッタリ。でもこれ以上太ったらアウトだ。

・某月某日

福祉工場で、バスケットチーム・ワークガールズとの交流会があった。体育館で、ストライクアウトを行った。私たちの作業所チームは4チーム中3位。

交流会の後食事会があり、おいしそうな料理がテーブルに並んだ。食べること大好きの私は、ワクワク箸をのばした。すると作業所の職員から、堀江さんはあまり食べちゃダメですよ、と言われてしまった。

誰か一人ぐらい、今日ぐらいいいわよ、と言ってくれるのを期待したが、誰も言ってくれなかった。太りすぎの私にそんなこと言うわけないのはわかっているが、ちょっと寂しい気持ちになった。

その反動が来て、家に戻ると冷蔵庫にあるものをやけ食いの状態で食べてしまった。食べ終わったとたん、やっちまったー、と後悔するが、後の祭り。

《風の呟き》

スペインの旅（3）

木下明男

アルメリアから、眠い目を擦りながらチャーターバスに乗りこみ、海岸線をグラナダまで走りました。この日の昼はグラナダに住んでいるホセ・カーノ（マヌエル・カーノの子息）の自宅にお呼ばれです。まずは超冷たいビールにて乾杯、そして奥様の手料理！喉が潤いお腹がいっぱいになりました。此処で、カーノ氏の愛器コントレラスが登場、コンサートフラメンコのミニコンサートが始まりました。何曲か弾いたあと、お父さん（マヌエル・カーノ）の曲を演奏、聴いているうちに涙が頬を伝って…私だけではない、みんなが目頭に手を当てていました。本当に素晴らしい演奏、楽しい交流でした。

翌日は、グラナダからセビリアへ移動（約250k）途中道路沿いには、夾竹桃がピンクと白の花を咲かせ、それにエニシダの黄色がたくさん・・・。そして、左右に広がる広野には一面のオリーブ畑と葡萄畑、そして向日葵畑や野菜畑？が、パッチワークの様です。移動と食事と観光中心のツアーだと時間に縛られ、予定されたカリキュラムを外せません？

このツアーは好きな処に好きな時間を掛けられる！それでも、大聖堂とアルカサルの宮殿と中庭は短時間すぎました、特に宮殿と中庭は施設の時間制限もあり残念でした？それでも、中庭の入り口に咲いた、ブーゲンビリアが美しかった！帰路はヒラルダの塔に夕焼けがかかり、部屋に戻ったら10時を過ぎていたが、窓の夕景に思わず見とれました。

この地方では珍しい降雨の中サンルーカルまで走る。高速道路の脇には、白色と桃色の夾竹桃の花が何処までも繋がる、左右に広がる向日葵の黄色と小麦の茶色の広大な畑。そして、オリーブ畑やワイン畑（葡萄畑）も延々と見え、スペインの広さを感じさせる。他に野菜畑や風車そして太陽光パネルが広がっていました。

やがてマンサニージャのワイナリーに到着、早々にワインの薫りで酔いが廻って仕舞いそうでした。シェリー酒の由来について、たくさんのレクチャーがあり、其の後早速試飲が、美味しいシェリー酒…！十分に楽しんだ90分です。勝手に禁酒を解除して幸せでした。

ワイナリー見学の後カディスへ向かいます。浜辺のレストランで昼食を取り、マヌエル・ファリャの眠る寺院へ行きました。本堂の下に墓が在り、そこにファリャは眠って居ました。ここの聖堂でも尖塔に上り素晴らしい街並みを見まわした。さすが海辺が似合うマラガの街並みでした！5時にセビージャに帰る予定だったが、サンルーカルのボディガで長居をしたのと、カディスの街をゆっくり見学したので、到着は2時間遅れだった。が、それが一般ツアーと違うこの旅の楽しさでもある。

帰国が近付き、お買い物に

焦りが…スイッチオンの女性群に吉川先生も…スペインの旅行最終日です、朝セビージャから新幹線でマドリッドに…。車内はユッタリ、座席は2列ずつ両側に、速度の割には揺れも少なく快適です。車内表示には、行き先案内や現在の走行速度も解る。この日はタクシー労働者のストライキ、マイクロバスも使えないので、地下鉄でマドリッドの中心地まで行く事にした。ホームからロビーまでのエスカレーターは、傾斜式で珍しかった(階段式もある)。地下鉄の発券機ですが、面倒くさそう…？

マドリード、グラナダ、アルメリア、グラナダ、セビリア、マドリードの各都市を起点として普通のツアーでは行かない処を堪能してきました。楽しい、素晴らしい10日間…また行ってみたいスペイン旅行でした！

盂蘭盆会

打田昇三

八月は旧暦の盂蘭盆会があり九月は彼岸と、此の季節は菩提寺との関わりも増えてくる。私の家系は台東区谷中の寺（日蓮宗）が菩提寺らしく、私の両親は関東大震災で池上の本門寺へ避難したという。父母も谷中に眠る筈なのだが、没落して母親の出身地・茨城県へ逃げて来たので恋瀬川の向こう志筑に埋葬されている。その寺は曹洞宗であるが、母親を育ててくれた女性が当時の住職夫人と懇意にしていたので墓地を得られたらしい。目の前には幕末に活躍した勤王の志士・伊東甲子太郎と鈴木三樹三郎兄弟生家の墓所がある。

私の母親は生後間もなく両親に死別した。祖父が土浦警察署か刑務所かの看守勤務を経て警視庁の巡査となり、伝染病患者隔離の職務中に感染し同時に祖母も感染死亡したのである。場所が東京であるから五歳の姉と嬰児の妹（私の母）とが大都会に取り残されたことになる。それを茨城に居た祖父の弟夫婦が遺骨と共に引き取り育ててくれたのである。常盤線は未だ無く、東京へは高浜港から船で行ったらしい。私の母は、養母である其の女性を実母と信じ終世、頼りにしていた。

祖父は職務上の死亡であるから遺児には警視庁から成人に達するまで養育料が支給されていて、其の代償では無いが、私の母親は二十歳になった時に警視庁高官の官舎へ奉公をさせられた。それも権力政治の象徴とも言える思想警察「泣く子も黙る特高」の親分の公舎であるから女中奉公でも嫁に行くほど厳しい身上調査が行われたらしい。

私の父親は東京生まれ・東京育ちで、宮内庁出入り金属装飾業の家の末子（三男）である。少年時代には、天皇が寝る寝台の修理作業などで皇居内にも入れて貰ったことが有るらしい。独立して家業にも従事したのだが苦労はしていない。東京新橋に小さな店を開いていた。その近くに警視庁の警察官が住んでいたのだが、出身地が偶然にも私の母親と同じ村であり、実家同士も近かったので母親との縁談を仲立ちしてくれたらしい。

私は長男であるが、生まれたのは両親が結婚してから十数年も経ってからである。早く生まれていたら成人時期が第二次世界大戦の最中になるので此の世には居なかったであろう。かの「二、二六事件」が起きた時には、降り積もる大雪の中、避難命令が出て右往左往していたのが最初の記憶であるから、其の頃は港区の愛宕山に在ったＮＨＫ放送局近く（現在の新橋）に居たと思われる。

やがて父方の伯父が港区から大田区へ工場を移したので両親も大田区(蒲田)に住んだのである。私も小学校入学は大田区の南六郷であるが昭和軍国主義時代で、小学校の先生でも暴力は当たり前の素晴らしい？時代であった。やがて日本は抜き差しならぬ戦争に突入してゆくのであるから其の侭、東京に住んでいれば空襲でやられたと思う。幸か不幸か父親が不治の病を患い、昭和十五年に一家は母親を育ててくれた義理の祖母の許へ夜逃げをして来たのである。

それ以来、茨城県の一隅で戦々恐々として暮らしてきたのだが偶然の機会から「ふるさと・風」に入れて頂き、有る事無い事を適当に書き続けているのであるから其の罪は重い。最近になって本籍は石岡に移したが、自然豊かな茨城出身では無いので書く事に雄大さが欠けると自省している。今年も盂蘭盆の季節が来た。簡素な暮らしながら穏やかに過ごせる日々を有難く思っている。

外来生物による被害

菅原茂美

近年、外来生物が国内に侵入し、在来種を駆逐し、生態系を乱し、経済的損失を与えたり、人命を脅かす現象が多く見られるようになった。

我が国への侵入で最近特に話題になったのは、ヒアリである。殺人蟻ともいわれ、強毒を持つ。これから政府は必死で防御体制を敷くと思うが、生半可な対応では、定着を許してしまう。

ヒアリはニュージーランドへも侵入したが、３年がかりで撃退したという。オーストラリアにも、２００１年に侵入し、現在、全国に蔓延。農業被害は年間８８０億円。既に、３６０億円もかけ、対策を講じてきたが、全国に広がってしまい、清浄化の見通しは未だ立っていない。

日本に定着している外来種は、ほぼ２０００種と言われるが、その４分の３は植物である。そのうち、明治以来の在来種を絶滅の危機に陥れている種を「侵略的外来種」と言い、明治以前のスズメ、ドブネズミ、モンシロチョウ、アカザ、ナズナなどは「史前帰化生物」と言っている。

ハクビシンやニホンヤモリは外来種であるがいつの時代に侵入してきたものか全く不明。

また家畜やペットとして意図的に輸入されたものには、アライグマ、アカミミガメ（ミドリガメ）、ヤギ、カイウサギ、カイイヌ、カイネコなどがある。更に天敵として沖縄では毒蛇のハブを駆除するために導入したジャワマングースは、かえって天然記念物のヤンバルクイナ、アマミノクロウサギなどを絶滅に陥れる恐れを増した。

また蚊を退治するため、米国南部から導入したカダヤシ（蚊絶やし＝アメリカメダカ）は、蚊のボウフラと生育環境が同じメダカを、駆逐に追い込み「メ

ダカダヤシ」と揶揄された。
　更にオーストラリアでは、趣味のウサギ狩りのためウサギを導入したら、むやみやたら増殖し、農業被害が拡大。そこでウサギの天敵キツネと猫を導入したら、ウサギではなく、豪州固有種の有袋類を脅かす事になり、四苦八苦。

●輸入動物による遺伝子の攪乱

　タイワンザルやアカゲザルは、日本固有のニホンザルと交雑して、純粋性が失われつつある。同じく、タイリクバラタナゴの輸入によりニッポンバラタナゴの純粋性が失われている。同じ事が、クワガタやカブトムシでも言われている。

●輸入動物による実被害

　１９０５年、ニホンオオカミは輸入した猟犬が持ち込んだジステンパーや狂犬病により絶滅した（そのため現在シカやイノシシが増えすぎた）。なおエゾオオカミは１９００年までに、明治政府による懸賞金付き撲滅政策により滅亡した。その為、今、北海道の食物連鎖の摂理が崩れ、エゾシカが増えすぎ、農林被害が甚大。
　カミツキガメは北米原産。温度依存性決定動物（孵化温度により雌雄が決まる）。ペットや展示用として輸入されたが逃げ出したり捨てられたりして野生化し、最大は50㎝にもなり、夜行性で凶暴。食性は広く、在来の色々な生物が害を受けており、人が咬まれると大けがをする。現在、千葉県の印旛沼水系に定着。静岡県の狩野川水系や上野の不忍池でも目撃されている。
　また意図した輸入ではないが、コンテナなどに付着し、侵入してきたブラジルサシガメが、人（多くの哺乳類も）の吸血をすると、トリパノゾーマ原虫を媒介し、シャーガス病を発生し、リンパ腫・心臓病・脳脊髄炎などで死亡する。
　日本住血吸虫は哺乳類特にヒトの門脈に寄生し、吸血して赤血球を栄養とし、肝硬変などを起こす。ミヤイリガイが中間宿主で、ヒトが終宿主。東南アジアに広く分布。日本で究明されたのでこの名が残る。日本では１９７８年頃ミヤイリガイがほぼ撲滅され、２０００年に正常化宣言された。しかしどこかにミヤイリガイはまだ残っているらしく、中国人などキャリアー（感染者）が来日し、糞便など垂れ流しすれば、再び本病は復活する恐れがあり、懸念されている。
　かつて中共軍が蒋介石軍を追い詰め、台湾へ侵攻する直前、中共軍に日本住血吸虫症が蔓延。進行中止。後に台湾を救ったのは日本住血吸虫と言われた。観光客の来訪はありがたいが、危険な海外生物だけではなく、感染者の来訪対策は、しっかり防がないと、後日に悔いを残す。
　グローバル化による経済交流もよいが、人知の及ばぬ方法で、外国の害虫や害獣が侵入し、日本人の生命財産を脅かす現実は、全知全能を傾け、防がなければならない。

滅亡の譜

打田昇三

　天皇の名を翳した軍部独裁の時代と違って名目上は民主主義の現代なので国民の意見が政治に反映されているとは思うのだが、議会制民主主義では多数を擁する与党に属さなければ逆立ちしても其の意見が通る見込みは無い。野党を支持する国民も少なくは無いのであるから、其の意見が少しでも考慮される様な制度を、頭の良い（頭の形だけかも知れないが）議員は考えるべきであろう。
　実態はどうでも「民主主義」と言われる現代でも多数の原理で独裁政治に近いことが可能なのであるから封建的な時代には、それこそ時の流れを良く見極めて行動しないとウダツが上がらないし何よりも生きてゆけないことになる。戦国の世の武将たちは、さぞかし苦労をしたことと思う。
　天正十八年（一五九〇）十二月二十三日、石岡では桓武平氏の源流を連綿と継承していた名門の大掾氏が、豊臣秀吉党の振り翳す「全国統一法案」に賛成しなかったため、与党に追従する県北の佐竹義宣軍に攻められて滅んだ。良く考えると大掾氏は「法案に賛成しなかった…」のでは無くて、そういう法案が有るのを知らなかったのだと思われる。いわゆる「世間知らず」である。
　天正十八年は関ヶ原合戦の十年前で戦国時代も終りに近い。織田信長が築いた政権の地盤を豊臣秀吉が継承したニュースは世間の噂などで石岡にも伝わっていた筈である…にも拘わらず大掾氏は世情に疎く府中城と呼ばれた此の城に閉じ籠っていたらしい。尤も府中城は小田氏などに狙われて何度も危機に曝されていたから、必要以上に用心深い対応があったのかも知れないが？
　此の年の四月には豊臣秀吉が大軍を率いて小田原城（北条氏）を囲み、水戸の佐竹氏や仙台の伊達政宗などが小田原参りで秀吉に挨拶している。府中城（石岡）の大掾氏は行かなかった。水戸の佐竹氏は大掾氏を誘ったのだと思う。しかし其の直前に佐竹は水戸城の江戸氏を滅ぼしているから府中城主・大掾清幹は警戒したのであろう。当時、高校三年生であるから無理も無いが石岡には時代を見通せる有能な家臣が居なかったらしい。此の状況を知った佐竹は喜んで、府中城（大掾氏）の討伐を秀吉に進言した。事情を知らないから秀吉は「好きにしろ！」と言った。

其の日、大掾清幹は不意に攻め寄せて来た佐竹の軍勢を防ぐ為に千二百騎を率いて泉町通りを駆け抜け石塚街道へ向かった。園部川を越えた辺りで敵の先鋒に遭遇したのだが、それが徳川家康でさえも一目置いたと言われる猛将・車丹波守忠次の軍勢であるから、少年城主の手には負えない。其れでも必死に戦って気が付くと、周りには敵ばかりで味方が居ない。家来が先に避難したので敵陣を突き破ってようやく府中城まで退いて来た。

翌日、大掾清幹は軍勢を立て直して府中城の護りを固めたけれども佐竹軍には車丹波守、戸村十大夫、渋井内膳、根本筑前守、小野崎越前守など多くの武将が居た。何よりも豊臣秀吉さえも畏れない太田三楽がバックに控えていたらしいから、とても敵う相手では無い。

当時、府中城には二つの井戸と多数の池があり水には困らなかったのだが敵は府中城下北部に火を放ち、煙と共に攻め込んで来たらしい。落城前に多くの武士が城主より先に逃亡した、と言われるから立派である。

孤独な少年城主は城の抜け穴から脱出、祖先の墓前で自刃したと伝えられる。

【特別企画】

内田升三の私本・平家物語

巻第七 - (一 - 1)

農産物に旬(しゅん)が有るように権力にも消長が有り、権勢を誇っていた平家も市場で飽きられるようになると値段は下がる一方で打つ手打つ手が上手くいかない。此処で諸国の源氏が一致団結すれば大きな力になるのだが、何しろ下積み時代が長かった為に源氏一族も仲間同士が疑心暗鬼の状態になっていて結束が出来ない。中心人物として源頼朝が有望視されては来たが二十年も囚人生活をして来た身では、中央市場でどの程度の相場が付くのか未知数である。

其の様な時に木曾山中から山菜の珍品が出たように木曾義仲が現れて、あれよあれよと言う間に平家勢力を追い落とし都に向かい進撃を始めた。

平家が当てにしていた北陸勢が木曾義仲に敗れたのが寿永元年秋のことである。そのまま木曾義仲が快進撃を続けていれば平家は早々と都を追われたであろうけれども、主導権が宙に浮いている源氏は敵と同じくらいに身内同士が信用できないし特に鎌倉に腰を据えた源頼朝が誰からも頼まれないのに自分が源氏のナンバーワンだと思っているから、木曾山中から出て来た無名の義仲がバッタバッタと平家軍を倒したのでは都合が悪い。さらに頼朝の叔父である源行家が頼朝と不仲になり、その行家が義仲に近づいたために、寿永二年の春には頼朝と義仲との仲が険悪になった。結局は義仲が巴御前(ともえごぜん)との間に生まれた息子の義高(義重)を人質として鎌倉に送り、辛うじて両源氏が和解をした。人質となった息子が巻第七の最初に出てくる清水冠者なのである

是からは栄枯盛衰が顕著で「平家物語」ではあるが源氏勢力の出番が多くなってくる。巻第六まで頑張っていた平清盛があの世に行ってしまった後の我が大日本帝国は、平家の束縛を解かれた小規模な「群雄割拠」が実現しており、関東に源頼朝が居て徐々に地盤を広げ、平家は京都を死守する覚悟で無駄な抵抗を試み、木曾義仲は奇抜な戦法で主に北陸方面から平家を苛(いじ)めていた。そして東北地方には、奥州藤原氏が独自の世界とも言える「藤原王国」を形成しており、西国は平家の地盤ではあったけれども少しずつ平家離れが進行していた。しかし都落ちする平家の行き場所としては西国しか無かったのである。

巻第七の最後には平家が京都を離れ福原を追われ船で放浪の旅に出る。現代は豪華客船によるクルーズがお金持ちの楽しみらしいが、平安時代末期の平家及び安徳天皇は、行く先が無くて仕方なく船に乗ったのであり、本当の流れ者になってしまったのである。寿永二年(一一八三)夏には、暑い京都にも居いて貰えず、冷や汗をかきながら西に向かって逃げて行く他は無かった。

清水冠者(しみずのかんじゃ)のこと

以前にも触れたと思うが、此の場合の冠者はスパイでは無く、元服はしているが未だ任官していない武士のことである。鎌倉を拠点として反平家運動を展開していた源頼朝と、木曾で平家討伐の兵を挙げた木曾義仲とは同族ながら商売敵のようなものであるから基本的に仲良くは出来ない。

寿永二年三月上旬に、第三者が関わる幾つかの原因で頼朝と義仲の関係が険悪になった。平家軍が攻めて来る心配が無いと判断した頼朝は見当違いにも木曾義仲追討の軍勢を準備して十万余騎の軍勢を信濃国に派遣した。木曾義仲は現在の長野県上田市の南方に在る依田城に居たのだが、平家軍では無く源氏が攻めて来るというので呆れながらも取り敢えず防御の為に信濃国と越後国との境になる熊坂山に陣を布いた。頼朝も余裕を見せて参詣を兼ねた本陣を善光寺に置いた。

納得がいかない義仲は乳母の子である重臣の今井四郎兼平を使者として頼朝の許に送り「どのような理由で木曾義仲を討とうとなさるのか？貴方は東八か国を討ち従えて東海道から攻め上り平家を追い落そうとなさって居られる。木曾義仲は東山道、北陸道を従えて一日でも早く平家を討とうとしている。それなのに何故に義仲を攻めて平家に得をさせる様な事をされるのか？思い当たることは、十郎蔵人（源行家＝頼朝の叔父）殿が頼朝殿を恨むことがあるとして木曾に来られた際に、義仲がすげなくするのもどうかと、普通にお迎えしただけのことで、義仲は頼朝殿に対して何の謀反心も持ってはおりません…」と申し入れた。

是に対して頼朝はしつこく「今は其の様に言うが、木曾義仲が此の頼朝を討とうとして謀反を企てた、と申す者が居るから信用は出来ない！」として土肥実平や梶原景時を先鋒とする討手を差し向けようとした。本文には書いて無いが梶原景時は頼朝が挙兵した際に敗れて山中に隠れていたのを見逃してから、後に頼朝に従ったのである。

木曾義仲は頼朝の執念深さに呆れながらも対立を避ける為に止むを得ず、十一歳になる嫡子の清水冠者義重（吾妻鏡では「義高」となっている）に側近の海野小太郎、望月、諏訪、藤澤など信州武士を付けて頼朝の許に送った。其処までされると単細胞の頼朝は機嫌が良くなり「木曾殿の本心が分かった…頼朝は未だ成人の男児を持たないので、義高を自分の子にしよう…」と、清水冠者を連れて鎌倉に引き上げて行った。なお、木曾義高の母親は今井四郎兼平の妹か娘で、義仲に最後まで従っていた有名な女武者の巴御前らしい。

北国下向（ほっこくげこう）のこと

源頼朝との和解が成立した結果であろうけれども木曾義仲が東山道（信濃、飛騨、美濃、近江）、北陸道（越後、越中、加賀、越前、若狭）の二道を制し五万余騎の軍勢で京の都に攻め上る…という噂が聞こえてきたので平家は去年（寿永元年頃か）から「明年は馬に若草を喰わせる頃（四月頃）には合戦がありそうなので、準備をしておくように…」配下の武士団に達していた。それを受けて山陰、山陽、南海、西海の諸国からは多くの兵が来たけれども、東の国々は既に一部が源氏化していたので近江、美濃、飛騨は来たが東海道の諸国は遠江（とおとおみ＝静岡西部）から東の諸国（武士団）が来なかった。北陸道は若狭（京都府の日本海側）から北の軍勢は一人も来ない。日本全国に及んでいた平家の支配圏が激減したのである。

それでも平家は、先ず目障りな木曾義仲を退治してから憎い頼朝を討とうと、北陸道へ軍勢を派遣した。大将軍には小松三位中将維盛、越前三位通盛（清盛の甥）、但馬守経正（清盛の甥）、薩摩守忠教（清盛の弟）、三河守知教（清盛の弟）、淡路守清房（清盛の子）と将軍の名前を覚えるだけで疲れるほど揃えた。将軍の下の侍大将には越中前司盛俊（平家未流）、上総大夫判官忠綱、飛騨大夫判官景高、高橋判官長綱、河内判官秀国、武蔵三郎左衛門有国、越中次郎兵衛盛嗣、上総五郎兵衛忠光、悪七兵衛景清など平家古参のうるさい武士が三百四十人も充てられていたから、下っ端の兵卒たちは、敵に恐れる前に味方の怖いボスたちを恐れて震えていたことであろう。

平家軍は総勢十万余騎、寿永二年（一一八三）四月十七日の午前八時頃に都を発って北国（信越地方）に進撃した。十万の軍勢では人数を数えるだけでも容易では無いし食糧調達も大変である。

其の為に平家は勝手に沿道諸国の租税挑発権を得ていたから、途中に在る権力者や領主などが保管する国有財産やら、国庫に入れるべき財産などを片端から奪い取って平家軍の費用に充てた。

進路に当る滋賀（大津）・辛崎・三河尻・真野・高島・塩津（浅井）・貝津（海津）など街道筋では集団強盗に遭ったように次々と没収されたので堪（たま）り兼ねた住民たちは付近の山野に逃げ込んだと言われる。平家軍は新たな敵をつくった。

竹生島詣（ちくぶじまもうで）のこと

竹生島は琵琶湖の北部に在る小島であるが其処には都久夫須麻明神（つくぶすまみょうじん）が祭祀されていた。明神とは霊験あらたかな神のことである。神仏混淆（しんぶつこんこう）の名残で今でも明神の境内に神宮寺として弁財天を祀る寶厳寺という寺院があり、竹生島観音も名高い。

北陸地方に遠征する十万余の平家軍は琵琶湖の西岸を北上したようで、先頭を行く大将軍の平維盛、通盛は既に琵琶湖の北端、現在の奥琵琶湖に近づいていたと思われるが、副将軍の平経正、忠度、知教、清房らの隊列は未だ西近江路の塩津、貝津辺りに居た。平経正は詩歌管弦に通じた人物（風流人）であったから、是から合戦に行く途中ではあるけれども、足を止めて琵琶湖岸に下り、遥かに湖面を見渡すと十キロほど先に在る小さな島影を見つけた。家臣の藤兵衛有教という武士を呼んで「あの島は何と言うのか？」と問えば「あれこそ有名な竹生島です」と答えた。

それを聞いた経正は合戦に行く途中であることを忘れて「そうであったか…それでは行ってみよう…」

と言いだした。言われた家臣たちも合戦より観光のほうが良いので特に反対もせず、早速、地元で小舟を借り、平経正に藤兵衛有教、安衛門守教など重臣五、六人が従って島へ渡った。この状態を見ても平家の遠征が全員一致の結果では無いことが分かる。時節は春の半ばであるから梢の緑、谷の鶯、杜鵑（ホトトギス）、松には藤がからんで咲き掛かり、正に春の観光シーズンである。一同は足早に舟を下りて岸に上がった。島の景色は言葉に言い表せないほどである。

昔、秦の始皇帝や漢の武王らは純朴な少年少女を派遣し或いは神仙の術を使う道士に命じて不老不死の薬を求めさせた。命じられた者は、霊薬が在るという蓬莱国（ほうらいこく＝古代中国で信じられた仙人の住む国）を見るまでは帰れない！と悲壮な決意で出掛けたが、いずれも目的を達せず航海途上で死んでしまった。（竹生島の様子は）その蓬莱国を思わせる神秘的なものであった。

或る経文に「閻浮提（えんぶだい＝仏教でいう南方の大陸、人間界）の中に湖水があり、其の中に水晶の輪が有って其処に天女が住む」とあるが、それは、即ち此の島（竹生島）のことであろう。

平経正は竹生島明神の前に畏まり「それ、大弁功徳天（弁天様）は昔から此の島に鎮座されている仏法の真理である。弁財天、妙音天と名は分かれても本地仏は一体であり、衆生を救って下さる仏であり一度、参詣すれば願い事を叶えて下さる頼もしい神である（頼りにしております）」と熱心に祈願をした。その頃には日も暮れて「居待の月」と呼ばれる陰暦十八日の月が出て海上を照らし、社前も明るくなって神秘的になってきた。

竹生島に奉仕する僧たちも「これは御存じかと思いますが…」と琵琶を奏した。平経正も是に和して秘曲を演奏した。曲が神域に響き渡り、聞いていた神仏も感應して経正の着衣の袖に白い龍となって現れた。平経正は忝（かたじけ）なさに涙ながらに

「千早ふる神に祈りの叶へばや
　　しるくも色の現れにける」

と、その感慨を詠まれた。是により目前の敵を打ち破り反逆の者どもを平げることは容易い事と勝手に決めて、喜んで舟に戻り竹生島を後にしたのである。結構な話ではあるが、幾ら神社参拝とは言っても最高指揮官の許可なく、隊列を離れて勝手に島へ渡ると言う行為は規律違反に

か…余計な心配ではあるが…。

・東風凍を解く

旧暦の七十二候ではこの「とうふうこおりとく」と表わされるこの季節から新しい年が始まる。今の新暦では、およそ二月四日から8日頃である。

この季節に新しい年が始まるというのは、人の暮らしのリズムからすると、実に理にかなっていると思うのだが、ここを一月一日、元日というわけにはいかないのだろうか。

風が温み、体が活発になる時だから良いのではないかと思うのだが。

編集事務局　〒315-0001
石岡市石岡13979-2
TEL 0299-24-2063
（白井啓治方）
http://www.furusato-kaze.com/

ふるさと風の会会員募集中！

当会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間達を募集しております。
自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。
○会費は月額 2,000 円。（会報印刷等の諸経費）

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。
白井　啓治　0299-24-2063　打田　昇三 0299-22-4400
兼平智恵子　0299-26-7178　伊東　弓子 0299-26-1659